

R3地域協働研究（ステージⅠ）

R03-I-04 「観光客誘客に向けた観光消費を促進するためのコンテンツの構築」

課題提案者 一般社団法人宮古観光文化交流協会

研究代表者 宮古短期大学部 大志田憲

研究チーム員 三村敬之（宮古短期大学部）、高岩将洋（宮古観光文化交流協会）
宮井久男（岩手県立大学名誉教授）

<要旨>

震災以降における県内沿岸部の観光客数は、教育旅行等での団体入込数は一定程度維持しつつも依然として厳しい状況にあったが、新型コロナウイルス感染症拡大によりさらに減少している。加えて、個人・小グループへの旅行形態の変化によるニーズの多様化、地域の人口減少が進む中で、既存の観光資源の活用方法だけではなく、より観光消費の促進、滞在時間を増やす改善が望まれる。これからの観光客となる若い世代が興味を持つ観光コンテンツを構築するため、学生による食・体験、五感等を中心とした現地調査、グループワークを通して課題検討を行った。

1 研究の概要（背景・目的等）

東日本大震災以降、県内沿岸部は教育旅行等の入込数はある程度維持しつつも厳しい状況であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、さらなるダメージを受けている。加えて、地方において特に顕著な人口減少、旅行形態の団体から個人・小グループへと変化といった課題もあり、観光客の受け入れ側、着地側としてもハード、ソフト両面での大きな転換の必要が迫られている。そこで、コロナ収束後も見越し、新しい旅行形態、観光客の興味を考慮した、より観光消費を促進するための既存の観光コンテンツ（観光商品）の改善、新しいコンテンツ開発が望まれている。よって、そのコンテンツ構築のために、現状の岩手県における観光旅行者の状況調査、沿岸部の観光資源に対するイメージ調査およびそれらを効果的に活用、改善し今後の観光資源として観るだけでなく、食べる、体験するといった滞在時間、観光消費を促進する工夫が必要となってくる。

2 研究の内容（方法・経過等）

以下の内容で宮古観光文化交流協会（以下、観光協会）と学生が参画する形で協働研究を進めた。

- ・観光協会と学生も交えた、宮古市の観光状況、課題の情報共有、意見交換
- ・岩手県観光統計概要、観光白書、日本交通公社旅行年報等による状況把握
- ・観光協会提案による沿岸観光資源について、現地調査および参加学生へのアンケート
- ・アンケート集計結果をもとにした、学生グループワークによる観光資源の現状分析および観光コンテンツの提案

3 これまで得られた研究の成果

今年度の協働研究として活動した内容および調査結果の一部を以下に示す。

（1）宮古沿岸部観光状況についての情報共有

学生も交えた協働研究を進めるにあたり、観光協会を講師に迎え、調査対象でもある宮古を中心とした沿岸部の観光状

況について、令和3年4月28日に研修会を実施した。



図1 研修会

（2）文献等による現状分析

岩手県観光統計概要、国土交通省による観光白書、公益財団法人日本交通公社による旅行年報等をもとに、統計データによる岩手県を取り巻く観光客の状況調査を実施した。一例として、表1は日本交通公社旅行年報2019～2021から、岩手県を訪れる観光客の交通手段（複数回答）の主だったものをまとめたものである。

表1 岩手県を訪れる観光客の交通手段

調査年	自家用車	列車	レンタカー	定期観光バス 貸切バス	路線バス	サンプル数
2018	45.4%	22.2%	21.0%	13.7%	9.8%	187
2019	44.2%	26.1%	14.2%	17.6%	9.8%	100
2020	55.9%	19.7%	6.3%	7.1%	12.1%	136

出所：（公財）日本交通公社「旅行年報」2019,2020,2021年度版より抜粋し著者作成

年度ごとのばらつき、新型コロナ感染症拡大による公共交通機関利用の減少などの要因は考えられるが、自家用車の移動が多い。レンタカー利用も合わせると約6割前後が自動車移動になる。このことから、車移動を中心とした、好きな時間に好きなように観光地を移動したり、景観を見てすぐに移動する様な、家族や小グループがターゲットとなり、食・体験などの滞在時間を増やす、五感を満たす観光コンテンツの構築が必要となる事が想定される。東京、大阪等の都市圏では自家用車、レンタカーの比率は下がり、列車での移動が中心となる。北東北3県における旅行者居住地を見てみると、岩手県を訪れる観光旅行者は北東北からの旅行者が多いことがわかっている。

（3）沿岸観光地現地調査、参加学生へのアンケート調査

コロナ感染症拡大の影響もあり、参加学生および現地調査箇所や日程の制限もあったため限られた調査ではあったが、観光協会からの提案観光地にて以下の現地調査を行い、各場

所について、観・食・体験および五感に関する項目等のアンケートを収集した。

- ・宮古地域：令和3年5月29日 参加学生10名
宮古駅、さんてつや、田老学ぶ防災、浄土ヶ浜（青の洞窟、レストハウス含む）、宮古市魚市場、宮古市魚菜市場
- ・岩泉地域：令和3年11月15日 参加学生10名
熊の鼻展望台、龍泉洞、うれいら商店街、道の駅いわずみ、ふれあいランド岩泉
- ・山田地域：令和3年12月22日参加学生9名
鯨と海の科学館、道の駅やまだ



図2 現地調査

(4) 学生によるグループワークの実施

宮古地域や観光プラン等の学習について、いわて若者カフェと連携し、カフェマスターの下向理奈氏を招き、交流ミーティングを実施した（図3の左図、令和3年10月3日）。宮古市の観光プランなどを考えるにあたって、「地域について住んでいても知らない事が多い」、「情報発信およびその発信方法に課題がある」との意見も多く今後の課題について再認識できた。参考として図4は、行政に観光支援として望むことのアンケート集計結果である。



図3 グループワーク

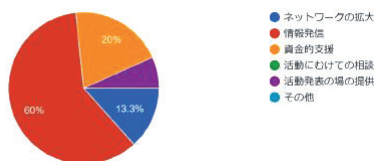


図4 行政に観光支援として望むもの

また、観光協会も交えての学生グループワークにてアンケートをもとにした分析、観光地における体験提案を行った（図3の右図、令和4年2月8日）。アンケートでは各観光地について、観・食・体験の3項目について5段階評価で記入する形式、より細かく五感（味、視、嗅、触、聴）に対する評価したものを実施しており、その結果をもとに検討を行った。図5は、観・食・体験アンケート結果を可視化するためバブルチャートとしてグラフを作成したものである。このグラフは横軸が「食べる」、縦軸が「体験する」、バブルの大きさは「観る」となっている。これよりグラフの第2象限に位置する観光資源に食を加えるといった新規コンテンツ開

発やルート構成等の工夫が考えられる。

また、図6は各観光資源の味、視、嗅、触、聴覚の五感についてアンケート評価をグラフ化したものである。想定どおり浄土ヶ浜が全体的に高い結果が出ているが、体験を増やし滞在時間、観光消費を促すためには五感における触感がこれからのポイントのひとつになると考えられる。

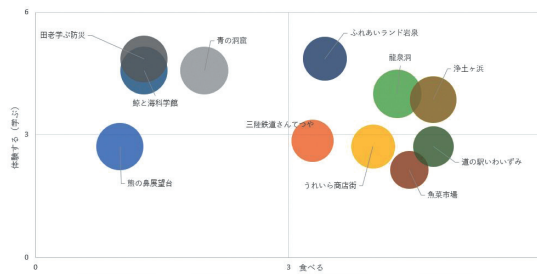


図5 各観光地の食べる・体験バブルチャート（バブルサイズ：観る）

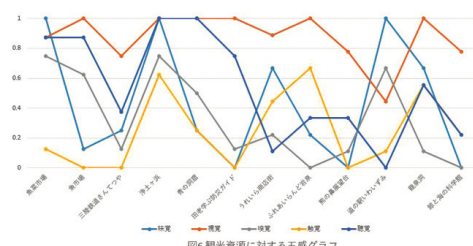


図6 観光資源に対する五感グラフ

そして、これらを結び付け、各観光資源について従来の活用にプラスαとする発想について観光協会とのグループワークにて検討を行った。

4 今後の具体的な展開

新型コロナウイルス拡大の影響もあり、十分な現地調査、アンケート集計ができなかったが、各観光資源における観る以外の観光消費の促進、滞在時間を延ばすための他の食、体験あるいは、五感の調査を実施することができた。特に触覚の面を意識した新たなコンテンツ作りもひとつの手であるとも考えられる。観光資源の新たな活用案については、意見を収集する段階までしかできなかったが、実現性も含め今後も継続して観光協会と協力し研究を続けていく。

5 その他（参考文献・謝辞等）

【参考文献】

- ・令和2年度版岩手県観光統計概要，岩手県商工労働観光部観光・プロモーション室，2021年8月．
- ・令和3年度版観光白書，国土交通省，2021年8月．
- ・旅行年報2021,2020,2019版，公益財団法人日本交通公社，2021～2019各年10月．
- ・大羽昭仁『地域が稼ぐ観光』，宣伝会議，2018年10月．
- ・杉本興運，磯野巧編著『若者と地域観光-大都市のオルタナティブな観光未旅行を探る-』，ナカニシヤ出版，2021年4月．

【謝辞】

学生グループワーク、観光学習にご協力いただきました、いわて若者カフェ並びにカフェマスターの下向理奈氏に感謝申し上げます。